



是川中居遺跡出土の藍胎漆器（八戸市埋蔵文化財センター所蔵）

竹などの植物の繊維で編んだかこの内面と外面に漆を塗った容器に「藍胎漆器」がある。現在でも工芸品として製作され、縄文時代では東日本を中心に出土している。しかし、植物質であるため、水によって空気が遮断された低質地でないと残りにくく、土器などに比べて出土量が少ない。

16点・赤漆塗り櫛9点・赤漆塗り腕輪1点が出土した。土している。藍胎漆器には壺や鉢があり、いずれも内側と外側に赤い顔料を混ぜて漆が塗られている。漆に含まれている赤い顔料については、ベシと呼ばれる酸化鉄のみのものと、酸化鉄や水銀朱を使用しているものがあるとわかった。また塗膜の断面から現状で2層ないし3層あり、当時はより多く塗り重ねられていたと考えられる。

かこの出土例は縄文時代早期から全国で出土しているが、残りにくいことから出土数は少ない。しかし、かごを真似た土器や、かごに似た文様を持つ土器が出土しているため、土器が出現した頃から存在し、土器とともに普遍的に使用されていた可能性が指摘されている。

藍胎漆器の底には編み方により、4つの突起をもつことから出土した壺形土器の底に同じような突起をもつものがあり、藍胎漆器やかごを真似して作られたと考えられている。

青森の漆―縄文時代④―

伊藤 由美子

（県民生活文化課

県史編さんグループ 主幹）

青森県内では縄文時代後期以降、藍胎漆器が多く出土する。特に縄文晩期土井（1）遺跡、亀ヶ岡遺跡・是川遺跡の出土品が有名である。ことがわった。これらの編み方は現代でも使われている。

となるかごは、分析により2点がイネ科竹笹類を素材にし、ごさ編み、網代編みなどの技法で作られていた。これら

普遍的であったかごに漆を塗り重ね、美しい器にした藍胎漆器から、縄文人の心の豊かさが見える。

板柳町土井（1）遺跡は、

岩木川右岸の自然堤防上に

立地する低質地遺跡である。

赤漆を塗った土器・石器・

玉類などと共に、藍胎漆器

は川中居遺跡では内外面を

藍胎漆器が出土している。

藍胎漆器が出土している。

藍胎漆器が出土している。

藍胎漆器が出土している。